

令和元年度  
UR  
ひと・まち・くらし  
シンポジウム

2019年10月23日  
阪急うめだホール

特別プログラム  
新しい日本の住文化

# 再生・創造の実践とデザイン

令和元年度「UR ひと・まち・くらしシンポジウム」は、「元気なまちをデザインする」をテーマに開催しました。

大阪会場の特別プログラムでは、まちづくりの最前線で奮闘する様々な分野の4人の専門家にご登壇いただき、人口減少や少子高齢化が進展する時代においてまちを元気にする取り組みについてお話をいただきました。

株式会社星田建設  
空間都市研究所  
**星田 逸郎氏**  
建築家、日本建築学会  
技術部門設計競技優  
秀賞を受賞。URの  
「向ヶ岡第一団地」等の  
設計も手掛けている。



HITOTOWA INC.  
**荒 昌史氏**  
HITOTOWA INC を設  
立。集合住宅を軸にし  
た暮らしの創出や、都  
市の社会課題を解決す  
る事業を展開。



HITOTOWA INC.  
**奥河 洋介氏**  
発展途上国や高齢化集  
落などで住民と伴走す  
る自治活動を継続。地  
域の自立に向けたリ  
ポートを得恩とする。



株式会社  
スペースRデザイン  
**吉原 勝己氏**  
福岡を中心に、古いビ  
ルの再生と入居者間交  
流などを中心としたヒ  
ンデンシビル文化を創  
出する事業を展開。



## 人口減少と少子高齢化時代に向けて、 住文化の何を継承して、何を創るのか？

進行役：荒氏

今日は「新しい日本の住文化 再生・創造の実践とデザイン」という大きなテーマを掲げていますが、最初に私の方で論点整理をしたいと思います。ご存知の通り、今後わが国は人口減少や少子高齢化など大変難しい状況を迎えますが、その中で「どのように元気なまちをデザインするか？」について、より一層良いアイデアを出して、これを実践していくことが求められます。

まず人口減少の状況について確認しますと、日本の総人口は2060年までに約4,000万人減少すると言われています。その中で生産人口が減少し、結果として不動産業界の市場も小さくなると想定されています。次に少子高齢化についてですが、今から40年の間に人口に対する14歳以下の割合は2.8%減少し、65歳以上の割合は10.8%増加すると推計されています。これに伴い、空き家の数が一貫して増加し続けると言われております。なかなか楽観できない情勢です。

ただ、こういった危機的状況であるからこそ、今、まちを良くしようという本質的な取り組みが生まれています。そこで今日は「再生と創造」をテーマとして、これまでの日本の住文化をつくってきたものの中から何を継承して、何を新たに創造していくのか、ということを考えたいと思います。



## 設計者として集合住宅の事例を紹介！

パネリスト：星田氏



日本の集合住宅デザインに関するエポックは「ユニット配列」「配遊構成」「住居性能」「住戸デザイン」そして「コミュニティ」と時代毎に変化をしてきました。今後、日本の社会が大きく変化の中で、集合住宅は多様な暮らしと“かたち”をフィットさせ、包摂的な環境をつくりあげていくことが重要になります。その手掛かりとなる考え方や事例を紹介させていただきます。

### 集まり合う形を再編すること

時代と社会の変化するにつれて、家が集まり合う形も修復していく必要があります。集まり方は関係づくりであり、みんなの領域をつくり出すことであります。そのような試みを紹介します。



左：住棟の集まり合い方によって、そこにできる空間やそこで生まれる生活に大きな変化が生じます。

右：棟の配置を活かして印象的な場を設けた向ヶ岡第一団地メトロップ再生実験棟

### 繋がり合う形を育むこと

リノベーションによって既存の建物をまちや外部に繋げる手法は色々あります。また内部にテラスなどの共用空間を埋め込むことで、入居者同士を繋げたり、生活シーンに多様性をもたせることも可能です。



左：住棟とまちと繋げるきっかけとなる建築手法の一部

右：屋上に設けた共用のテラス。住民同士の新たな憩いの場となります。